

日本農林漁業振興会会長賞受賞

山と海 自然の恵みを大切に みんなで楽しく福吉（さと）づくり

受賞者 ふくよしちいき 福吉地域づくり推進協議会 すいしんきょうぎかい

ふくおかけんいとしまぐんにじょうまち
(福岡県糸島郡二丈町)

■ 地域の沿革と概要

二丈町は、福岡県の最西端に位置し、北は玄界灘、南は佐賀県唐津市七山、東は前原市、西は佐賀県唐津市浜玉町に境を接している。

南には、二丈岳、十坊山、浮嶽、女岳などの山々が連なる背振山系が位置し、ここから福吉川、加茂川、一貴山川などが北流し、玄界灘へとつながっている。

交通網は東西にJR筑肥線、西九州自動車道路、国道202号が併行して走っている。

人口は13,644人で64%がサービス業などの第3次産業に就業している。

農業、漁業などの第1次産業就業者の割合は13%で、高齢化が進んでいる。



■ むらづくりの概要

1. 福吉地域の特色

福吉地域は、二丈町の西部に位置し、南側は800m前後の山々が連なる背振山系で、北側は玄界灘に面し、その間が狭小な水田地帯となっている。年平均気温は16.2℃と比較的温暖で、その気候を活かし、カンキツ、露地野菜等を中心とする農業地帯として発展してきた。

平成17年度の農業産出額は8.7億

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	旧市町村
地区の性格	地縁的集団
農家率	17.0%
	(内訳)
	総世帯数 1,336戸
	農家数 227戸
販売農家数	167戸
	(内訳)
	専業農家 38戸
	I兼農家 26戸
	II兼農家 103戸
主要作物 ()内粗生産額	野菜 (267百万円) 畜産(乳牛、繁殖牛) (185百万円) 果樹 (163百万円)
農用地の状況	耕地計 209ha
	(内訳)
	田 112ha
	畑 94ha
	牧草地 3ha
	耕地率 7.30%
	農家一戸当たり農用地面積 0.9ha

円で、野菜が約 30%を占め、次いで畜産、カンキツと続いている。

一方、漁業は福吉漁港中心に 51 戸の漁家が沿岸漁業に取り組んでおり、平成 17 年度の水揚額は 6.6 億円である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

福吉地域は他地域に比べ水田が少なかったことから、昭和 30 年代からカンキツの生産が急増し、昭和 39 年には米の販売額を凌ぐようになった。その後も増加の一途を辿り、昭和 46 年からはハウスミカンの栽培も始まったが、昭和 50 年代に入りカンキツが生産過剰となってきたことから収益性が低下し、栽培面積の減少が始まった。このように、基幹品目の低迷により地域の活力が次第に低下していった。

ア かんきつ産地の危機

福吉地域は耕地の約 1/2 が樹園地で、県内有数のカンキツ産地であった。販売額は昭和 53 年には約 5.3 億円に達したが、価格の下落、担い手の高齢化に加え、カンキツ園転換政策が実施されたことから販売額は年々減少し、昭和 63 年にはピーク時の半分以下の 2 億円を下回るようになった。

地域内にはカンキツ園を中心に耕作放棄地が急増し、平成 7 年には全耕作面積の 17.6%、平成 12 年には 24.7%に当たる 65ha が耕作放棄地となった。このようにカンキツ産地を取り巻く環境はますます厳しさを増していった。

イ 脆弱な農業基盤

福吉地域の中山間部はカンキツ園や棚田等が点在している。平坦部は海岸に面した幅 100~200m のわずかな部分に水田が位置し、区画は非常に狭く、水路は用排水兼用の土水路で、用水の確保と軟弱地盤に苦勞しながら農業が営まれてきたが、このような地形やほ場条件下で「どうすれば福吉の農地が守れるのか」、「農業を守り、農地を子々孫々に伝えるにはどうすればよいのか」という大きな課題に直面していた。

ウ 漁業の不振

福吉漁協（現糸島漁協福吉支所）の水揚金額は平成 3~9 年は 8 億円前後で推移していたが、その後、水揚量の減少とともに激減し、平成 13 年にはピーク時（平成 7 年）に比べ約 40%減の 5.4 億円となった。これは、平成 10 年以降輸入水産物が増加した影響で、kg 当たりの単価が大幅に低下したことが大きな原因である。

このように、漁家の経営は年々厳しくなってきたことから、福吉漁協と漁民は一体となって経営安定化への道を模索していた。

エ 福吉地域づくり推進協議会の活動

むらの農業の将来に対し危機感を持った農区長会が、福吉地域の農業振興を目的に、平成4年、「福吉農業振興協議会」を設立した。そこで、農業者、JA等に呼びかけ、平成5年、「福吉の農業を考える大集会」を開催した。その後、「農業者だけでの話し合いでは真の地域活性化にはつながらない」というリーダーの発言をきっかけに、同協議会を発展的に解消し、農業者、漁業者、商工業者までメンバーを拡げた「福吉地域づくり推進協議会」を平成8年に設立、業種を超えて福吉のむらづくりを引っ張る組織を作り上げた。

地域内には、日曜日のみ開設する小規模の直売所や夕市があり、市場に出荷できないカンキツや畑の片隅で栽培していた野菜類を販売していた。しかし、農業者から「もっと大規模な常設直売所が欲しい」、「そこで販売することで農業の活性化、高齢者の生き甲斐づくりにつながる」との意見が多く出されるようになった。また、水揚量の減少から経営不振に落ち込んでいた漁業者からも「農業者と一緒に直売所をやりたい」との声が出てきた。

これらの意見をもとに、協議会では地域の活性化のためには、まず、直売所を核とした地域づくりが急務であるとして、直売所建設に向けた取組を開始した。その結果、地域住民が待ち望んだ直売・交流・加工の機能を有した福吉活性化交流施設「福ふくの里」（以下、「福ふくの里」という。）が平成14年開設された。

また、地域ぐるみのむらづくりには住民の理解と行動が大切であるとして、平成11年に地域全住民の1/4にあたる約1,000人を集めた「福吉地域づくり大集会」を開催し、『山と海 自然の恵みを大切に みんなで楽しく 福吉(さと)づくり』をスローガンに福吉の明日の姿を語り合った。この大会は熱気あふれるものとなり、住民が地域の活性化に目を向けるきっかけとなった。これを契機に、翌年には住民参加による「福吉産業まつり」の開催、さらに、地域情報誌「福吉(さと)づくり」を作成し、全戸配布して、地域の情報共有を図ることによって、次第に住民同士のつながりを強めていった。

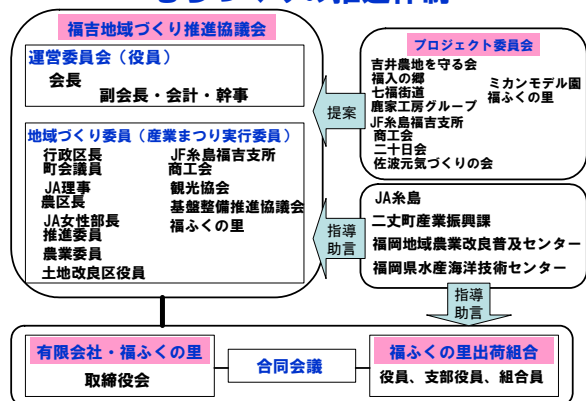
(2) むらづくりの推進体制

ア 住民一体となった協議会体制

福吉地域づくり推進協議会の構成は、福井、大入、吉井上、吉井下、佐波及び鹿家地区の6行政区長、農区長、農業・漁業関係機関、商工・観光関係機関等から選出された49名の委員で構成されており、協議会への意見の集約は、各行政区を通じて地域内すべての住民から反映することが可能となっている。さらに、運営の迅速化を図るため、委員の代

第2図 推進体制図

むらづくりの推進体制



表者で組織する「運営委員会」が設けられている。

また、「プロジェクト委員会」を設置し、むらづくりに係わる企画、立案を行い、「運営委員会」に提案できる体制をとっている。

イ 迅速な対応、新たな事業展開のため「福ふくの里」を法人化

「福ふくの里」の管理運営は「福ふくの里管理利用組合」が行ってきたが、新しい直売所や大型スーパーとの競争が激化する中、消費者ニーズへの迅速な対応や新たな事業展開等、経営判断が必要となってきた。そこで、これまでのように組織全体での合意を得て進めていたのでは、手遅れになるとの判断から法人化へ向けて1年間研修や検討を重ねた。

その結果、生産者が運営する直売所としては、県内初の有限会社に組織を変更し、有限会社「福ふくの里」として新たに発足した。

■ むらづくりの特色と優秀性

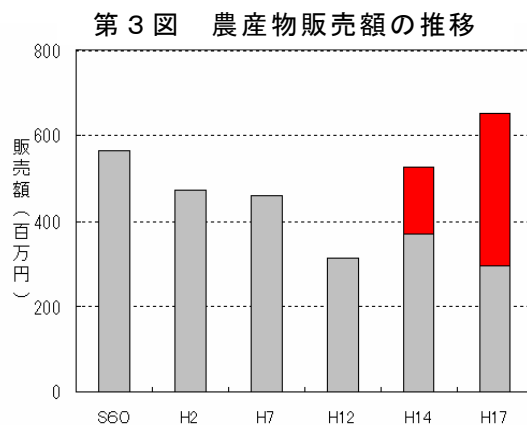
1. むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

(1) 「福ふくの里」を核とした農家、漁家の活性化

ア 目を見張る所得向上効果

「福ふくの里」の販売額は設立初年度から目標を大きく上回る 2.9 億円となり、平成 17 年度は販売額 6.6 億円、来客数約 38 万人となっている。その結果、「福ふくの里」での販売額をあわせた地域の農産物販売額は昭和 60 年を上回る状況になっている。

出荷者 1 人当たりの販売額は県内直売所トップクラスの 244 万円であり、特に漁業者は 533 万円に達している。また、出荷経費の削減により、所得向上効果は非常に大きい。



イ 直売所独自のハウスリース制度で新たな生産と豊富な品揃え

「福ふくの里」では、販売品目数を増やすために新たな生産者や新規品目導入の推進、販売や作付状況調査に基づく栽培講習会を定期的で開催してきた。

生産拡大のためには「出荷者の土地に直売所がハウスを建てればよいのではないかと考え、生産者育成のための独自のハウスリース制度を平成 16 年に創設した。これは希望者が建設費の 70% を 5 年間、リース料として支払えば、その後は自分の施設となる仕組



写真 1 ハウスリース制度で建設されたハウス

みである。

その結果、これまで地域内では栽培されていなかったルッコラ、サラダホウレンソウ、からし菜、ヒユナ、エンサイなどの新規品目の栽培が始まった。

ウ 消費者のハートをつかんだ鮮魚販売

「福ふくの里」では、新鮮な水産物が安価で購入できることや珍しい魚種が豊富にあること、さらに漁業者が行う魚の料理法の説明や3枚下ろしなどの一次加工サービスが消費者に大好評で、「福ふくの里」の最大の魅力となっている。

平成17年は漁家の90%にあたる45名が出荷しており、販売額は年々着実に増加し、2.4億円に達する等、重要な販売ルートの一つとして確立し、漁業の活性化に大きな効果をもたらしている。



写真2 水産物販売の様子

(2) 地元の田んぼを守るため、いち早く農業法人を設立

福吉地域は、ほ場が狭隘で、機械の大型化が進まず生産性も低かったので、「このままでは水田が守れない」と早期のほ場整備を熱望していた。

そこで、「福吉地域づくり推進協議会」が中心となり、ほ場整備の実現に向けて何度も納得を得るまで話し合いを行った。

その結果、平成8年度から「担い手育成基盤整備事業」、平成11年度から「中山間地域総合整備事業」により57.2haのほ場整備を行い、水田面積の約4割でほ場整備が完了した。

さらに、ほ場整備をきっかけに発足した福井地区営農組合は、平成18年4月に農事組合法人「福入の郷」（以下、「福入の郷」という。）に発展し、品目横断的経営安定対策に加入するなど、県のモデル的な組織となっている。

(3) 農地・水・環境保全向上対策への先駆け

福吉地域では、10数年来、「福吉地域づくり推進協議会」や環境稲作研究会およびNPO法人「農と自然の研究所」を中心に、環境にやさしい稲作を実践してきた。この取組を基に県は、独自の「県民と育む農の恵みモデル事業」（平成17年～19年）を創設した。そこで福井地区では、いち早く取り組んでいる。これは、減農薬栽培を行っている水田の生き物の数や種類を調べ、減農薬栽培が水田の生き物に与える影響を調査するものである。

そのような中、平成18年度からは「福入の郷」が福岡県減農薬・減化学肥料栽培認証を取得するなど、環境にやさしい農業に地域全体で取り組んでいる。

また、国の農地・水・環境保全向上対策の先駆けとしてのモデル調査事業にも県内で唯一取り組み、平成19年度からは、「福入の郷」が中心となり、PTA、子供会、老人クラブ等地域住民を巻き込んで、農地・水・環境保全向上対

策事業に取り組むことになった。

(4) 海と山のこだわり産品づくり

福吉地域では、「あかもく」や「カキ」が特徴的な水産物となっている。「あかもく」はこれまで利用されることはなかったが、漁協と県水産海洋技術センターが協力して、西日本で初めて平成16年に商品化した。加工は漁協女性部の部員から希望者を募り結成した「あかもく部会」が行っている。

カキは、「福吉のカキ」として、冬になると焼カキ小屋が立ち並び、それを目当てにした観光客で賑わっている。さらに平成18年には「乾燥カキ」の商品化を行い、販売を開始している。

また、減農薬・減化学肥料栽培米をはじめ、赤米・黒米も多く栽培されており、赤米は全国有数の産地となっている。カンキツ類でも、協議会会長の石井氏が育成した中晩生カンキツ「はるか」が、他地域では手に入らないカンキツとして人気があり、年明けの目玉商品となっている。

(5) 安全・安心農業の実践

野菜、果樹は、「福ふくの里」が県内で最初に残留農薬の自主検査を行い、消費者へ安全のアピールを行うとともに、「福ふくの里出荷組合」においても福岡県減農薬・減化学肥料栽培認証や、エコファーマー認証の取得を推進する等地域ぐるみで安全・安心な農産物の生産に取り組んでいる。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 新しい生きがいと働く場づくりでいきいき女性・高齢者がいっぱい

「福ふくの里出荷組合」の75%は女性であり、また60歳以上が57%を占めており、このメンバーが「福ふくの里」を支えている。

「福ふくの里」では、設立当初から加工班が設置され、地元農産物を活用した弁当・菓子・惣菜等を販売している。設立メンバー10人のうち8人は「福ふくの里」の加工施設で技術を身につけ、自宅に施設を整備して独立し活躍している。これは「福ふくの里」が新規の女性起業者を育成する目的に加工施設を半年間無料で使用できる制度を設けているためで、その結果、女性起業者による販売額が5千万円を超えるまでになっている。

また、「福ふくの里」では地域の女性雇用を行うなど、新たな雇用の場を確保している。

(2) 地域ぐるみで取り組むファンづくり

地域の活性化を図るために、「福吉地域づくり推進協議会」と「福ふくの里」が中心となり消費者交流を行っている。

「福吉産業まつり」は住民が主体となった地域住民参加型の祭りである。バスハイクや船による海上クルーズ等魅力的なイベントや肥培管理されていなかったカンキツ園を再利用しミカン狩りを行い、消費者に大変好評である。

一方、「福ふくの里」では、開設当初から毎月千人鍋（豚汁、海鮮汁）や七草粥などを無料でふるまい、隣接した「ふれあい交流農園」では消費者との体験交流イベントを開催している。また、「福ふくの里」前の水田では秋はコスモス園、春は菜の花園に姿を変え、今では地域観光コースになっている。



写真3 交流イベントの様子

このような活動により町内への観光客数は、「福ふくの里」建設前の平成14年の47万人から、現在では2.5倍の118万人となった。

(3) 伝統文化・観光資源で山と海をつなぐ

福吉地域にある「姉子の浜」は鳴き砂として全国的に有名である。環境汚染の影響で一度鳴かなくなったが、平成6年から住民の自主的な清掃活動により復活し、今では大切に浜が守られている。

福井神楽は、二丈町の無形民俗文化財に指定されており、毎年5月に白山神社に五穀豊穰を祈願して奉納される神楽である。

9月には赤米の稲穂が真っ赤に色づき最大の見頃を迎える中、赤米夜神楽が行われる。併せて、「福ふくの里」を会場として平成18年から「コスモス夜神楽」が新たに開催されるようになった。

10月の福吉神幸祭は、大漁祈願のお祭りで各区氏子達が大名行列を行うもので、海では漁船が大漁旗を押し立ててパレードが行われるなど、むらづくり活動を通じて、なお一層農家や漁家の結びつきが深まり、祭りが盛り上がりを見せている。

このように福吉地域では、山と海の祭りを通して住民の結びつきが深められている。

(4) 新しい動きの展開

ア 食育、学校給食で地元農・漁業へのやさしいまなざしを育てる

子供達に対する食育をより一層促進するため、農業者が小学生に水稻、ブロッコリー、サツマイモ等の栽培を指導している。また、JAカンキツ部会福吉班では、学校給食へカンキツを10月から4月まで毎月2回無料で提供している。



写真4 食育活動の取組

福吉地域では、全国の7大学の学生が、空き家を借り寝泊まりし農家で農作業を手伝い食育や環境問題について考える取組

を行っており、これを地域ぐるみで支援をしている。

漁業面でも平成18年から学校給食用に「あかもく」の提供を始めており、今後は「いりこ」の提供や回数を増やす計画である。

イ 福吉に新しい風を創る

「福吉地域づくり推進協議会」プロジェクト委員会の構成員である「福の会」は、県道143号藤川二丈線を七福街道と称して活性化に取り組んでいる。街道には、窯元、みかん園、つつじ園、日帰り温泉等14施設が点在しており、これらの経営者が協力して植樹活動や七福街道祭りなどを行い、地域活性化に新しい風を吹き込んでいる。

第2表 むらづくり関連行事一覧表（平成17年度）

	福吉地域づくり推進協議会		その他	
	定例会等	産業まつり	福ふくの里・出荷組合	地域行事
4月	役員会 運営委員会 地域づくり推進大会		取締役会月1回計12回 合同会議月1回計12回	秋葉様
5月	運営委員会 会計監査		創業祭 福ふくの里総会 福ふくの里出荷組合総会	福井神楽
6月		プロジェクト委員会	野菜作り講習会 農産物残留農薬自主検査 ふれあい農園 (サツマイモ植え)	
7月	運営委員会	プロジェクト委員会	海の日イベント 夏野菜加工品研修	天神様 住吉様
8月	福吉中山間地域農業基盤整備推進協議会総会		先進地研修(農産物) コスモス播種	かざらの綱引き (大入白山神社) 盆踊り
9月	地区対抗運動会	プロジェクト委員会 (2回)		
10月	運営委員会	実行委員会 出店者会議 実行委員会	コスモスまつり 先進地研修(海産物) ふれあい農園 (サツマイモ収穫)	福吉神幸祭 おくんち
11月		第7回産業まつり ミカン狩り体験	農産物残留農薬自主検査	コスモス夜神楽

12月			年末イベント (餅つき、ハマチ・カンパチ販売) 講習会 (栽培、表示、農薬 適正使用) 冬野菜加工品研修	
1月			七草イベント 農産物残留農薬自主検査 野菜作り講習会	
2月	地区対抗運動会		節分祭 支部懇談会 (7回) 勉強会 (笑顔について)	
3月			野菜作り講習会 ひな祭り 支部懇談会 (漁協) 接客方法研修 勉強会 (カラーについて)	初午